

大阪イノベーションハブの機能について

大阪市都市計画局大阪イノベーションハブ担当
角 勝

大阪イノベーションハブ（OIH）の誕生

2013年4月、西日本一の乗降客数を誇る巨大ターミナルである大阪・梅田駅に隣接する巨大開発「グランフロント大阪」がオープンした。

グランフロントは大阪市の主導のもと、関西の知の集積を作ることめざして建設された複合施設であり、その中核機能の一つが「大阪イノベーションハブ（以下「OIH」という）」である。



大阪イノベーションハブのロゴ

OIHのビジョン

OIHの使命は関西・大阪からイノベーションを次々と生み出すこと。そして、そのためのエコシステムを整えていくことである。

イノベーション・エコシステムを作る…この大きな目標に向けて、OIHは、多くの自治体とは一線を画するビジョンのもとに動いている。そのビジョンとは、「常にオープンであれ」ということ。

自治体がハコモノを作った場合「この施設は市民もしくは市内の企業でないと利用できません」と言うのが一般的だ。

しかしOIHではその真逆のことを言っている。「OIHの理念に共鳴してもらえたら、どこの人でも企業でも構いません。一緒にイノベーションの輪に入ってください」と。

OIHの外的な機能～イベント開催～

OIHが単体で有する機能は少ない。シードアクセラレーターのようなメンタリング機能も資金提供もできない。基本的にはイベントの開催のみである。しかし、その開催回数は年間200回を数える。しかもそのどれもがイノベーション創出に関するものである。これだけの数のイノベーション関連イベントの開催には時間も費用も掛かりすぎる。行政がすべて自前で実施することはほぼ不可能である。

そこをOIHは、外部のプレイヤーを多く巻き込み、自らのイノベーションの輪に取り込んでいくことで解決した。



オープン記念イベントの様子



ものアプリハッカソンの様子

OIHの会員制度

”OsakaHackersClub”

OIHでは、(一定の審査はあるものの) 住所地などの制限なくエントリーできるOsakaHackersClubという会員制度を作っており、すでに300人を超える個人会員と100を超える法人会員を有している。会員になれば、OIHでのイベント開催など多くの特典が得られる。この会員制度がイノベーター達を集めるマグネットとなっている。

こうしたOIHの機能が育んだ事例として以下、二つのスタートアップを紹介する。

OIHが育んだプロジェクト事例

①Moff (モフ)

MoffBandはこどもが手首に装着する電子玩具である。この製品のセンサーユニットが、手の動きをスマートフォンに送信し、状況に応じた様々な効果音を発することで「ごっこ遊び」を楽しめる。

これを世に出したスタートアップ「Moff」はOIHが開催した第1回ものアプリハッカソン参加者達により結成された。その後、同じくOIHが実施したシリコンバレーへの起業家派遣プログラムに参加し、このとき、プロジェクトを方向転換するきっかけを得た。そして、その後開催された第2回ものアプリハッカソンでMoffチームが出会った別のエンジニアの手により新たなプロトタイプが制作され、製品の方向性が決定づけられることとなった。

②Warrantee (ワランティ)

Warranteeは家電製品などの保証書を電子化するサービスを提供するスタートアップである。代表の庄野裕氏は大学卒業間際に前述のシリコンバレー派遣プログラムに参加して刺激を受け、就職の内定を取り消して起業した。そしてその後、OIHを経由して知り合ったIT企業クックパッドから出資を受けるに至っている。

上記の例では、いずれもプロジェクトの転換点となる要所所でOIHが新たな出会いを提供し、それが成長の足掛かりとなっている。

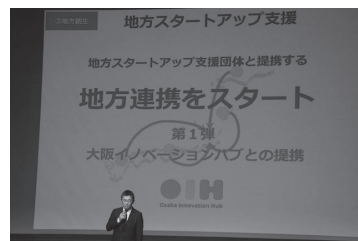
OIHの持つ機能の本質

前述した通り、OIHが単独で提供できる機能は少ない。しかし、足りない機能を外部から呼んできて補完するための磁力を備えている。

平成27年1月、OIHはKDDIムゲンラボと連携協定を結んだ。投資機能やメンタリング機能を備える東京の著名なシードアクセラレーターがOIHの磁力に惹かれてやってきたのである。

OIHの磁力は次々とイノベーションにつながるプロジェクトを生み出し、それぞれのプロジェクトはそれ自体が新たな磁力となって、投資家やVC、メンターなどをひきつけ、自ら成長していく。

多くの新たな磁力を生み、それらを束ね、成長させていく巨大なマグネット、それがOIHの本質的な機能なのである。



KDDIムゲンラボとの連携発表の様相